

思春期の発達障害児のキャリア発達を促す地域支援の試み

渡邊 雅俊

(國學院大學人間開発学部)

KEY WORDS: 発達障害のある中学生, キャリア発達, 職場体験活動

【はじめに】本研究は、発達障害のある中学生（以下、発達障害生徒）を対象とし、地域専門機関が連携して実施した「発達障害者の思春期就労準備支援事業」の検討を行う。そして、発達障害生徒のキャリア発達に有効な職場体験活動のプログラムについて考察する。

【事例】「発達障害者の思春期就労準備支援事業」1. 事業の経緯:平成26年度にY県から「発達障害者の思春期就労準備支援事業（3年計画）」の委託をM市が受け、同市内の社会福祉法人S会が事務局となり事業を開始することになった。**2. 運営の仕組みとプログラム（就労支援ワーク）構成:**運営組織は、委託元のY県から障害福祉課と教育庁、発達障害者支援センター、委託先であるM市は障害福祉課と教育推進課の他に障害福祉における相談支援や就労を専門とする機関から構成された。また、この事業を利用するM市立中学校の担当代表教員と職場体験事業所の担当者も入っている。実行委員は14名であった。プログラムの構成は、生徒向け学習会として①事前講座を行った後に②就労体験（職場体験）と③ふり返り講座が実施された。また生徒向け学習会の事前講座の実施時に、保護者向け学習会も開催した。**3. プログラムの利用者:**「事前講座」は、M市の中学校特別支援学級に在籍する発達障害または発達障害の疑われる中学生11名（以下、生徒）が参加した。内訳は、全員が男子生徒であり、1年生2名、2年生3名、3年生6名であった。また、学校毎の人数はA中学校1名、B中学校4名、C中学校2名、D中学校4名となった。「保護者向け学習会」には9名の保護者が出席した。「就労体験」と「ふり返り講座」は当日に2名の欠席があり、リサイクル体験コースは生徒3名、サービス業体験は6名の計9名となった。**4. 研究倫理上の配慮:**プログラムを利用した中学生とその保護者及び事業主体（Y県、M市、社会福祉法人S会）に対し、プログラムの記録を研究目的のために利用することを文章と口頭で説明し同意を得た。**5. プログラム内容 ①事前講座:**「生徒向け学習会」は、人材開発を専門とする講師を招き、働くことの基本について実践的に学ぶことを目的とした。参加した生徒たちは、当初、学校単位で固まっていた。そのため、消極的に見えたが、講座1におけるアイスブレイクと講師の分かりやすい解説によって、後半は楽しく学習に取り組んでいた。講座2では、M市役所がサービスの利用者へ送付するパンフレットを会場に持ち込んで貰い、グループに分かれて協働で折るというワークショップを行った。4人ずつのグループに分かれ（学校単位ではなく、会場の机の前で分かれる）、どのように折ったら効率よく、正確に折れるかなどの意見を出し合いながら作業を行った。講師から作業終了後、どのように協働作業を行ったか生徒に聞きながら、ふり返りが行われた。ここでは、生徒たちからも役割分担の必要性や、チームワークの必要性の発言などがあった。最後に、就労体験オリエンテーションを実施し、2つの体験コースの概要について説明を行った。そのうえで、生徒たちに参加企業の希望を聞いた。就労体験先の企業は、事前に作業手順書をカラー版で作っており、学習会の資料で生徒達に配布し、就労体験当日までに見て、作業理解を促す環境を整えた。「保護者向け学習会」では、まず保護者に「生徒向け学習会」における子どもの様子を見学して頂いた。その後、著者が、講師として「中学生の就労準備学級の意義」と題し、

主に自己理解や適性理解を促すための機会を与えることの重要性について解説した。また、保護者の我が子に対して、どのように進路選択について支えていけばよいかについて述べた。その後、保護者と著者や運営委員との意見交換・質疑応答を行った。保護者から多くの意見や質問が寄せられ、活発な意見交換が行われた。**②就労体験:**事前講座の3週間後に「②就労体験」「③ふり返り講座」が実施された。「リサイクル体験コース」は、主にインカートリッジ製造を行う事業所A内にある障害福祉サービス事業所で実施された。初めに、参加した生徒が自己紹介を行い、担当者から作業についての説明を受けた。その後、作業場に移動して、インカートリッジの分別作業に取り組んだ。生徒たちは、作業手順書を事前に配布されて予習できたことや、障害者にも分かりやすい作業工程の工夫や環境の構造化が施されていたこともあり、最後まで安定的に作業することができた。「サービス業体験コース」は、自動車販売業の事業所Bにおいて実施された。生徒たちは、自己紹介を行った後、事前に配付した手順書に基づき、作業の説明を聞いた。そして、同社で洗車業務を担っている社員の指導を受けながら、作業に従事した。1台目の時点では、清掃の要領を掴むことや洗車機器の扱いが難しく、生徒たちのなかには緊張や不安を示す様子も伺えた。しかし、2台目になると、作業の要点が分かってきた者もあり、集中して作業に取り組んでいた。**③ふり返り講座:**午前中の就労体験に続き、昼食後に午後から実施された。これまでのプログラムで体験したことから学びを深めるために、著者が司会・進行を務め、ふり返り講座を実施した。まず、小グループで感想や良かった点、反省点、気づいた点を自由に話し合っ貰った。各自で発表メモを作成し、就労体験の感想や理由、働く事をどのように思ったか、そして、これから自分はどうするか（心がけたいことやなりたい自分、目標など）について、就労体験の写真をプロジェクターで提示しながら3分程度で発表した。大勢の大人の前で恥ずかしがる生徒もいたが、多くの生徒が発表を行うことができた。**【まとめ】**本事業で運営されたプログラムは、参加した発達障害生徒に対して「達成感・成功感を得る体験」を与え、「体験のふり返りによる自己の捉え直し」を促せたのではないかと考える。これは、障害者雇用を進めている2社の地域企業が就労体験先となったことが要因の一つであった。これらの企業は、能力や精神面で支援を必要とする成人を社員として雇用しており、従事作業の選定や手順の指導方法に実績を持っていた。そのため、短時間で生徒たちが作業に慣れることができた。また、事前講座において、働くための準備学習を参加生徒の特性に応じて実施できたことも有効であったと思われる。ふり返り講座では、専門家が主導して、生徒たちが体験を省察する時間を設けた。このことが、体験を通して気づいたことを仲間と話し合い、文章に書いてまとめ、発表する過程を経て、自己理解を深める機会を与えたと思われる。以上の検討をふまえると、学校が地域の専門機関と連携し、本事業のようなプログラムを運営することは、発達障害生徒のキャリア発達を育成することに貢献できるのではないかと考える。

(WATANABE Masatoshi)